



琉球大学教授(沖縄振興開発審議会委員)

伊波 美智子

「人魚の歌」という民話が石垣島にある。今から約二百年前のこと、月夜になると海から物悲しい歌声が聞こえてくるようになった。そして大津波の前夜、老人が網を引くと人魚がかかっていた。海の秘密を教えるから逃がしてくれと頼む人魚を海に放してやると、津波の襲来を教えてくれた。その知らせをきいて山に避難した人々は難を逃れ、信用しなかつた人々は海に消えてしまったという言い伝

人魚の歌と 手の精

④持続可能な発展と先人の知恵

えである。一万人余の死者を出したといわれる明和の大津波……人魚は人間に災害を知らせるために歌つていたのだ。

地図や洋画等の災害は自然界的動きを注意深く観察することで、ある程度その予兆を知ることができる。動物が教えてくれたというのはあながち根拠のないことではない。先人が語り継いできた民話の中に私たちは先人の生活の知恵や倫理感を見ることができる。もう一つ沖縄の民話を紹介しよう。

自然が豊かだったかつての沖縄では、樹木にも靈魂があると信じられていた。昔、ある村に、村の守り神として大切にされていた見事なチャーギ（イヌマキ）の木があり、毎日手をあわせて拝んでいた働き者の男がいた。ある日、美しい娘が現れ、恋仲になつた二人は夫婦になり、しあわせな日々を送る。しかし、立派なチャーギが首里の役人の目に止まり、築城のための御用材として差し出すよう

にいわれる。それだけは勘弁してほしいという村人の願いは聞き入れられず、どっさりほうびをやる男が泣く泣く木を切り倒した時、最愛の妻は息絶えてしまい、村もだんだん衰退したという。妻はチヤーギの精だった。

暗い宇宙空間に青く輝く地球は、二つとない人類の家であり、地球が健康であつてこそ人類を含む生命体もまた健康な生活を営むことができる。エコロジーの「エコ」とエコノミーの「エコ」の語源は同じで「家」という意味を表すギリシャ語のオイコスに由来する。エコロジーは家（地球、自然生態系）のことを研究する口音（科学理論）であり、エコノミーは、家（家計）をノモス（管理）すること、すなわち、食料やその他の生活必需品を供給してくれる自然を上手に管理するのが経済なのである。経済活動とは、資源（天然資源、人的資源、景観等）を交換価値のある商品やサービス、情報という形にして収入を得ることであるから、環境破壊や環境汚染を続ける経済活動は遅かれ早かれ行き詰まつてしまうことは明らかである。人間も自然界の循環の中で生かされていける生命のひとつであり、私たちは、自然界が生産するより多くのものを消費することはできない。

冒頭で沖縄の民話を紹介したのは、今、沖縄の自然環境が経済振興というかけ声の下に風前の灯火

状態にあるからだ。「鶴の恩返し」など、日本各地には生命を助けられた動物が人間に恩返しをする民話が多いが、人間が欲に目がくらんだり、約束を破つたりすると幸福は消えてしまう。

先ごろ、沖縄振興特別措置法（沖縄振興新法）が閣議決定された。新法では、沖縄が比較優位性をもつ重要な産業として観光産業をあげている。沖縄の海や山は、人々の心を癒し、多様な生命を育むばかりでなく、地球規模でみても貴重な資源である。島は小さな地球のモデルだといわれる。廃棄物を処理するのではなく、産業振興の枠組みに島の生態系保全を組込む資源循環型社会、すなわち資源の効率的利用を目指すゼロエミッショングローバルな島の開発が率先して取り組むべき課題であり、観光産業振興の視点からいっても経済的に十分見返りのある試みである。

持続可能な開発（発展）を提唱したりオの地球サミットから十年、今年の八月には南アフリカのヨハネスブルグでリオ+10の国際会議が開かれる。リオ・サミットで採択された文書「アジェンダ21」は、人類が他の生物と共に存しつつ持続可能な開発を実現するための行動計画である。今や、自然環境の保全はグローバルな課題であり、先進国として日本は国際的責任を負っている。沖縄の産業振興の方向性も持続可能な社会を目指すことを見出せるのではなかろうか。